

梅若伝説

中世の物語世界



左・『紙本着色梅若権現御縁起』(木母寺)

すみだ郷土文化資料館専門員 高塚明恵

1. 梅若伝説の梗概

梅若伝説は、墨田区堤通にある古刹天台宗梅柳山木母寺に伝わる母と子の哀話です。現在も木母寺に伝わる絵巻「梅若権現御縁起」より、そのあらすじを記せば次のようになります。

吉田少将惟房と妻花御前は日吉神社に申し子をして一子梅若丸を授かる。梅若丸五歳のときに父が亡くなり、七歳のとき比叡山月林寺に入る。これ以上はない稚児として賞賛されるが、同じく稚児の松若丸との稚児争いから山中に迷ってしまい、人買いの信夫藤太にだどわかされる。藤太は梅若丸を奥州に連れて行くこととするが、慣れない旅のため隅田川の渡し場で力尽きてしまう。梅若丸を哀れんだ里人と偶然居合わせた忠円阿闍梨が路傍に葬って塚をつくる。

一年後、梅若丸の一周忌法要中に梅若丸を探して母花御前が現れる。塚に葬られているのが我が子と知った花御前は悲嘆にくれながらも、法要に加わりと塚の後ろから梅若丸の亡霊が現れ親子の対面を果たす。花御前は塚の傍に庵を建立し梅若丸を供養するが、ある日鏡ヶ池に入水してしまう。その遺体を乗せて亀が浮かび上がったので忠円阿闍梨が墓を建て、妙龜大明神として祀った。梅若丸は山王権現として転生した。

2. 能「隅田川」

謡曲「隅田川」は、世阿弥の息子観世十郎元雅(一四三二)によって、室町時代に作曲されました。能「隅田川」以前の梅若伝説の記録が確認できないため、梅若伝説は元雅の創作であ

るとする見方があります。

とはいえ、能はすでにある伝承や物語を題材にして作曲される場合が多くあります。例えば同じく元雅によって作曲された能「弱法師」も俊徳丸伝説を題材にしています。文字の資料として確認できないからといって元雅の創作であろうとするのは早計であるという意見もあります。どちらにしても梅若伝説は、隅田川の伝説として、根付いたことは確かです。

3. 梅若伝説の構成

資料によって話に若干の違いはありますが、梅若伝説は、①両親が神仏に祈願して子ども(梅若丸)を授かる(申し子)、②信夫藤太にだどわかされ隅田川までの苦しい旅の果てに亡くなる、③神仏に転生する、という構成になっています。

神仏に祈願して主人公が産まれ、苦難に満ちた旅をし、最終的に神仏に転生するという、梅若伝説と同じような構成を持つ物語に、「愛護若」「おぐり」「俊徳丸」「梵天国」などが挙げられます。これらの物語は現在、室町物語と呼ばれる物語群に分類されています。

室町物語とは十四世紀(室町時代)から十七世紀初頭(江戸時代初頭)にかけて成立した二百〜五百話の短編物語群の総称です。御伽草子・中世小説とも呼ばれ、伝本の多くが絵巻物や奈良絵本であり、大多数の作品の作者は不明です。題材は多岐多様にわたり、それまでの、主に貴族社会の恋愛を描いた物語とは異なり、僧侶・稚児・商人・職能民・遊女など、庶民の世界

を物語ります。梅若伝説も室町物語に属しているといえます。

室町物語は昔話や伝説、寺社の霊験譚など、当時民間に流布していた伝承や、それらを人々に語り歩いた唱導師の語りを取り込んで成立したと言われています。物語に登場する過酷な旅は、そのまま、土地から土地へ物語を語り歩いた彼ら自身の旅であったと思われるかもしれません。それゆえに、旅の場面の語りは一層聴衆の心を打ったことでしょう。木母寺所蔵の絵巻「梅若権現御縁起」では、梅若丸が旅をする場面は、リズムカルな七五調の文体で記されています。物語が上流の社会に受容され絵巻や奈良絵本に描かれても、彼らの語りの名残が留められているのです。

4. 梅若伝説の舞台

梅若丸は東北地方を目指す旅の途中で隅田川の渡しにたどり着きます。承和二年(八三五)六月二九日の「太政官符」には隅田川の渡船を二艘から四艘に増やす命令が記されています。その時代すでに隅田川には渡し場が設けられていたのです。

渡し場があったということは、そこまでの道があったはずで、明治四四年に東京通信管理局が作成した地図には、隅田川に大道北・大道南という字名が見えます。大道とは、大きな道ということです。大道北と大道南に挟まれた道が、大きな道、つまり、古代から続く主要な街道であったのです。この道筋は、墨田区北部を、隅田川から荒川ま

で横断する道路として現存しています。

また、この付近には中世期に「隅田宿」と呼ばれる町があったことが知られています。鎌倉幕府が編纂した『吾妻鏡』の治承四年(一一八〇)十月二日条には小山政光の妻寒河尼が息子とともに隅田宿の陣に頼朝を訪ねたことが記述されています。

墨田区北部地域には古代から街道が通り、渡し場が設けられ、その付近には中世になって町が栄えました。そのような地域的環境から、人商人にさらわれて、大津から旅をする物語である梅若伝説の舞台となったのでしよう。梅若伝説からは、中世期の墨田区北部地域を垣間見ることができます。



『番地界入東京全図』東京通信局(明治44年)より